



ランドスケープとの出会いは、大学の集中講義の故久保先生の『世界の広場のスライド』でした。先生の授業はお話が少なく眠りを誘うスライドで“先ずどんなものか見て自分の感性で考えろ！”的で、祝詞の如く意味深げな先生の言葉と、うす暗い中の魔術師的な写真に魅せられ、この世界の門をくぐってしまったと言えます。学部後、久保研に入りランドスケープをかじり出しました。院が修了する頃になると、スケール感や物、樹木に関する実感が乏しいことが不安で仕方ありませんでした。そのため、施工の世界に卒業後3年間身を置き、今もその感覚が判断ベースになっています。

その後、プレック研究所の大阪事務所開設の話があり、大阪と東京を行き来しながら事務所の充実化に努めました。仕事は環境調査から、計画設計、監理まで何でもという充実？の時代でした。その頃の思い出は、滋賀県の風景条例の制定にかかわる“技術指針の作成”でした。今では景観施策は当たり前ですが、当時では、ほぼ全国初の試みで、“景観とは何ぞや？から始まり、その構造的な解析から技術的な細かい基準を設定する”というかつてない基準づくりに事務所を挙げて汗をかきました。その後独立し約20年経ちましたが、やりがいは“ものづくり”です。先ず、現地をしっかりと見る事から企画提案を経て、設計そして工事の監理までの一連、特に最後の監理は重要で何もかも総仕上げです。私の場合は、オマケつきで供用後も様子を見に行きます。

我々は緑を始めとする生き物と共生する仕事なので、その姿は年と共に変わります。折々での管理や更新のアドバイスは非常に重要です。手がけた仕事の代表的なものは阪神競馬場のランドスケープデザインです。丸4年かけて完成に至りました。全ての樹木の調査、建築設計とのイメージ調整や当時は稀であった屋上緑化の工法検討など厳しいやりとりを経て全体をまとめました。競馬場には常にお客様があり、楽しんでもらう事が重要で反応はすぐに帰ってきます。競馬場に造形的な遊び場を作りました。何時訪れても子供たちが一杯で、それを見るとつい微笑んでしまいます。遊具から遊びの原点や目的が略奪され、遊具が遊具で無いと思えるこの頃ですが、この遊具にはそのデザインをした当社の仲間が、自分がそこで遊ぶ子供になって“わくわく感、創造性、チャレンジ心を起したくなる”気持ちが籠められています。その後の転機は、樹木医になったことで“木の言い分13”でも述べましたが樹木は多くの事を教えてくれそうです。

来年には、私も還暦がやってきます。『もうと言ひ、まだと思う』という誰かの曲があり、その歌詞の中に『もうと思えば下り坂、まだと思えば上り坂』と歌われています。私はこれからも葛藤を続けます。同時に、若い方や業界の姿を見て“もう何やってんねん！と愚痴をこぼすのではなく、いやまだこれからやりよる！”と思わないと嫌われ者の年寄りにまっしぐら！ですので、努めたいと思います。



中田 政廣

株式会社 ナカタ空間企画 代表取締役社長

技術士、RLA、樹木医

1949年生、神戸大学農学部卒、

大阪府立大学院緑地計画修士

